

読本内容作成にあたってのポイント、留意事項

(第2回編集委員会における主な発言より抜粋)

- ・想定は5年生。小学校5年生が理解できるようにつくれば、大人と兼用できる。
- ・都会の子どものイメージから抜けている里山などの間をつなぐ自然を想起させたい。
- ・大人の理論をおしつけるのではなく、小さい子の感性にどう響かせるかが大事。書き手は大人の子どもでないと上から目線になってしまう。
- ・記憶に残る本というのは、どれもボロボロになるまで持っていた。1回読んでわかるものでもいいが、何度もアクセスできるものが良いのではないか。
- ・多様な要素がつながっていることを可視化してイメージし易くする。目には必ずしも見えない、今の価値では評価されない、仕組みや生きものがいっぱい存在することに気付く配慮が必要。
- ・読み物としてよいものを作る、子どもたちの気持ちを引き込む読み物となると、文章自体に統一性がなければいけない。
- ・子どもたちに考えてもらうことは二つあり「本当はこういう形で生命系はできている」という話と「今は残念ながら、そうになってない」ということ。どぎついことを書く必要はないが、本来、生命系はこうなっているという話が軸。すると、後者の問題が全く出てこないのは不自然。
- ・ネガティブなことを正面から人間が語ったり問いかけると拒否反応が出がち。だから、「それでも」頑張ってたくましく生きる生き物に語ってもらう。
- ・森と川と海と里の暮らしみたいなものが有機的かつ密接につながっていた時代のことを情景としてありありと見せること。それがわかれば、多分子どもたちだって「今の川、こんなきれいになってない」というのはわかるのではないか。
- ・自然と人間が一番うまく有機的につながっているような時代のイメージ作り。人間たちが自然とどんなふう生きてきたのかというコンテンツを出しておくことが大事。
- ・みんなが忘れていたものは、森里川海がつながっていたということだったという、忘れられていたものを取り戻すというストーリーが良い。
- ・いつも霊山を仰ぎ見ながら農耕をやっていた。(自然への畏敬というものを)本筋にも少し含んでいく必要。
- ・誰かが気まずい思いをする本では広められない。
- ・ある時期の日本の、ある地域とか、ある川というのも想定したほうがつくりやすいという印象だが、地域限定の話ととらえられるとテーマ広がらない。